

# 体育教師の信念が授業に与える影響の考察 ——「健康で安全な豊かなスポーツライフの形成」 に焦点を当てて——

## A Study of the Influence of Physical Education Teachers' Beliefs on Teaching: Focusing on “the Formation of a Healthy, Safe, and Prosperous Sports Life”

田中 将也

Masaya Tanaka

### 1. はじめに

2017年7月に告示された小学校学習指導要領は「学校における体育・健康に関する指導を、児童の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること。」(文部科学省, 2017)として学校教育活動全体で「健康で安全な豊かなスポーツライフの実現」を果たすことのできる力を育成することを目指していくことを示している。また体育科の目標として「体育や保健の見方・考え方を働かせ…(中略)…生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」(文部科学省, 2017)としており、体育科として、基本的な運動技能の習得や自己課題の発見、運動に親しむ態度などを育成した結果として生涯を通じての豊かなスポーツライフを目指すことが示されている。この記載について、中学校・高等学校においては体育科から保健体育科と異なるものの、同じく共通して目指されているのは「健康で安全な豊かなスポーツライフの実現」(以後、豊かなスポーツライフの実現)であり、生涯スポーツの普及である。

池田(2020)は、1975年以降から「生涯スポーツへの志向を重視すること」が示されたとしている。このことを踏まえると、1975年から現在までの約50年近く、体育・保健体育科はその教育目標として「生涯スポーツへの志向」、「豊かなスポーツライフの実現」を目指している。

日本におけるスポーツの実施についてスポーツ庁(2022)は、第2期スポーツ振興計画の最終年にあたる2021年度までの結果として『令和3年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査』を発

表している (スポーツ庁, 2022)。その結果としては、成人の週1日以上運動・スポーツ実施率は56.4%、週3回の実施率は30.4%と週3回のスポーツ実施率30%以上は達成したとされるものの、週1度以上の運動・スポーツ実施率は目標の65%に届いていない状況である。

さらに、この週3回の実施率を年代別に詳細に検討すると20~50代の年齢層で低く、30代以降は年齢があがるほど割合が高くなっていることが指摘されている。また年代別のスポーツ実施における阻害要因としては、10代からは「面倒くさいから」、20代・30代で「仕事や家事が忙しいから」、30代では「子どもに手がかかるから」の割合が高くなっている。このことから学校体育から離れた後、運動・スポーツから離れ、30代から徐々に運動・スポーツに積極的に向かうことが考えられる。このことは、本来の体育・保健体育科が目指す「生涯にわたってスポーツライフを実現するための資質・能力」については十分に身につけられているとはいえない。学校体育としてはこの現状に対して、どのように児童・生徒の生涯スポーツへの継続を図るのか、更なる研究が進められなければならない。

## 2. 問題提起

これまで生涯スポーツを促すことを目的とした授業実践、研究は多く行われており (橋本・永浜, 2013など)、多くの教師が日々思考し、授業に取り組んでいる。

生涯スポーツを促すための授業を構成する際に、体育教師はさまざまな視点から授業を検討していくこととなるが、その行動思考や授業を形成する指針の一つとして教師のもつ信念 (ビリーフ) がある。

秋田 (1996) は信念について「ある事態に正しいか、正しくないか、望ましいか否かというように、命題の形で判断されるような心理的表象」<sup>1)</sup> と述べており、一人ひとりの教師が望ましい授業に関する授業観、学習観、指導観、認識観を有し、教師がどのような信念を有するかによって同じ状況下であったとしても選択する行動が異なるとしている。教師の信念は教師自身が生徒であった際の、被教育経験、大学での教員養成課程、教師としての経験から形成されることとなる。

教師としての経験については、体育教師は授業の経験以外に運動部活動指導や、生徒指導部といった役割への期待が存在する。体育教師が生徒指導や運動部活動指導を期待される要因として、沢田 (2001) は、「体育教師らしさ」という学校や社会からの発言がプラスやマイナスの意味合いを含み、単純化、歪曲化された上で用いられていることを指摘し、他教科の教師が体育教師と関わる際の行動選択、解釈、評価の準拠枠となり、それが体育教師自身を拘束すると述べている。このような体育教師自身や体育教師と関わる周囲の他者の準拠枠から、多くの体育教師が生徒指導や運動部活動に対しての役割期待を受け、教師としての経験を重ね、それに伴い体育教師としての信念を構成すると考えられる。

このような体育教師の教師観や信念に関わる研究は、朝倉・清水 (2014) の体育教師が保有する信念構造を実証し、体育教師の信念が教師の成長にどのような影響を及ぼすかを検討した研究、須

甲・四方田（2013）の体育教師の教師観を体育授業と運動部活動指導の二重性から検討した研究など複数存在する。

しかし、体育教師が生徒指導の役割を期待され、それに関わることによって構成される可能性のある信念構造が、目指されている体育の目標である「健康で安全な豊かなスポーツライフの実現」、すなわち、中等教育機関の卒業後における生涯スポーツの継続にどのように影響するのかを考察した研究は、管見の限り散見されない。

そこで本研究では、体育科という教科の特性と、体育教師が一定のステレオタイプを含んだ校務分掌にかかわる自己や他教師からの役割意識、教員養成課程での経験からどのような信念を構成する可能性があるのか、またそれが体育授業へどのような影響が考えられるのかについて考察を行うこととする。

### 3. 体育科における歴史的背景

#### 教科としての背景

安彦（2009）は教科の成立事情を、①学問型、②社会型、③職業型、④芸術型、⑤総合型の5つに分類している。

この安彦の教科の成立事情における分類から検討すると、体育科は「②社会型」に分類されるとしている。安彦はこの「②社会型」として成立した教科に対して、『「社会的要請」から教えられるべきものとして設けられ、必ずしも学問的背景がないか、もしくは弱いもので、むしろその「社会的要請」に答えられればよいので学問的な真理や体系を持っている必要はない。』<sup>2)</sup>と述べている。このことを踏まえると体育科という教科が、その時代背景や政治的な要請に強く影響されていることが考えられる。

#### 学校体育と生涯スポーツ

本稿冒頭でも述べたように、現在の学校体育で目指されているのは生涯スポーツへのつながりである。生涯スポーツが学校体育に求められた背景としては、1970年代の脱産業社会への転換によるものである。戦前における労働力、徴兵制など富強主義を背景にした軍事的要素を備えた内容や、戦後直後における運動・スポーツを教材として全人形成を目指した内容、基礎的体力の向上を目指した学校体育を経て、そこではスポーツやレジャーが大衆の文化として定着したことが大きな契機として多くの文献で述べられている（湯口・江尻, 2022、米津, 2017など）。

脱産業化以前については、身体的な規律意識や「全人形成」としての体力、精神力の向上、労働力としての社会性の育成が中心であったのに対し、スポーツ自体の価値を中心とする「楽しい体育」が展開されるようになった。西原（2006）は、この体育授業における「楽しさ」という体験の蓄積が運動への志向性が形成され、そのことが運動の継続的参加を促進するとし、体育教師の持つべき資質・能力とは、学習者における「楽しさ体験」を保証していくことであり、従来の規律訓練的な

指導法ではなく、場・ルール・時間等の工夫を行い、その学習者に応じた個々の対応が求められるとしており、以下のように述べる。「体力をつけるために一斉指導で教師は号令だけ出せばよい、あるいは、身体の動きを分解し、どの学習者も共通に同じスポーツの技能を身につけるために教師が技術を細かく教えればよいということではなく、学習者が個々の能力に応じてスポーツに楽しみ、その結果、体力がつき、技能が身につく、スポーツの楽しさを十分に学ぶことにより生涯スポーツを行おうとする能力を身につけさせるように教師が促すその促し方が現在の教師の資質や力量といえる。」<sup>3)</sup>としている

このことは現在も引き続き目指されている「豊かなスポーツライフの形成」ということに関わる指摘であり、体育教師として資質・力量について示唆的であるといえる。ここまで体育科の特性と、現在求められている体育科としての指導のあり方を概観した。そこで次からは体育教師が受ける授業以外の役割意識がどのような信念構造を形成する可能性があるのかを確認する。

#### 4. 体育教師の役割期待と信念形成

##### 体育教師の役割意識

前項で体育教師が授業においてどのような授業のあり方が必要なのかを確認した。しかし冒頭にも述べた通り、体育教師が固定化された視点から沢田（2001）の述べるように生徒指導や部活動指導の役割を強く期待されることから、その求められる授業形成に必要な資質・力量形成とは異なる信念構造を形成する可能性を本項では検討する。

体育教師における生徒指導的役割に関した研究として杉本（1989）の研究がある。杉本は体育教師の役割葛藤について論じ、近畿圏の中学校教師145名、高等学校教師265名の体育教師に質問紙法による調査を行い、体育教師の行動認知と欲求認知の関係を WILL（したくてしている）、CAN'T（したいけどできない）、MUST（したくないが、しなければならない）、NEED'T（したくないし、していない）という形でモデル化している。そこで見られる全体的な傾向として、体育教師は社会的状況に対して、WILLの傾向が強いとしており、WILLの項目に注目して、体育教師は態度の悪い生徒に対して、授業、クラブ活動、生徒指導においても直接注意することが圧倒的に多いと述べ、これらを同じ状況のものとして認知して指導を行っている可能性について言及している。また WILLに対して MUSTの項目が少ないということに対して、教員の外的状況が制御される制度的状況に対して、同調による戦略もしくは、外発的な欲求を内発的な欲求として内面化することによる戦略のどちらかを選択することによって体育教師の職業的社会的化（業務による必要な慣習、規範意識を身につける）が行われるとしており、このことから体育教師が周囲からの役割期待に沿った形で業務を行っていると考えられる。

杉本が体育教師の役割意識について、質問紙法により量的に分析している一方、石村・山西（2007）は、高等学校の体育教師17名に対して面接インタビューを行い、そのインタビューの結果、対象者の多くが生徒・学生時代に経験してきた運動部活動によって身についた競技外の知識・技能が生徒

指導を行う上で有効であると考えているとしており、インタビュー対象者からは体育教師の風貌や体格の大きさ、声量の大きさなどのスポーツ選手のような特徴が生徒指導を行うのに優れた能力を有すると回答している者も存在したとし、また別の対象者では「生徒指導には力で生徒を押さえつける指導が重要である」や「生徒に規則を守らせるために怖い教師が必要である」というように体育教師における「怖さ」を特徴的に扱った上で生徒指導を行うべきというやや過激ともとれる意見も見られたとしている。

その他の体育教師への役割期待に関する研究として、小泉（1996）は神奈川県内の公立、私立高等学校に在籍する保健体育教師191名と他教科517名を対象に質問紙調査を行い、その結果として、他教科教師と比較した場合、保健体育教師は生徒に対する管理主義的な考え方が浮き彫りになったとしている。また保健体育教師間において年齢を基盤とする上下関係の項目についても有意に上下関係が厳しいとしており、保健体育教師間でも上下関係のような規律意識が強いことを指摘している。この小泉（1996）と石村・山西（2007）における研究については、生徒に対する対応として上下関係に基づく生徒指導の側面が見られる。

杉本（1998）、石村・山西（2007）、小泉（1996）の体育教師の生徒指導に関する研究は体育教師自身が生徒指導に対して、その教師養成段階や教師になった後の職業的社会化に影響を受け、生徒指導の校務を積極的に担うべきであるという思考が確認できる。体育科という教科特性上、過去の運動・スポーツ経験から生じる体格の大きさや声量の大きさ等に対して、体育教師自身がそれを肯定的に捉え、生徒指導、部活動指導、さらに授業をおこなっていることが推測される。

### 体育教師らしさの形成

体育教師らしさの形成過程については教科指導での形成ではなく、体育教師が所属してきた、もしくは指導している運動部活動から形成されているとする研究が多く存在する。

坂本（2013）はこれまでの体育教師らしさがハビトゥスの視点から多く述べられてきたことについて指摘した上で、その獲得過程として現象学的身体論から体育教師らしさの獲得について述べている。坂本は日本における運動部活動の特殊性を指摘した上で、特定のスポーツを自らで選択して集まった運動部に存在する、様々な決まり事や暗黙的な振る舞い方（教師や先輩との接し方等）を知覚した結果、習慣の獲得すなわち、体育教師らしさという身体文化の獲得につながるとしている。

また本稿冒頭に挙げた沢田（2001）は、教員養成課程での隠れたカリキュラムとしての運動部活動の所属から、禁欲的競争主義を運動部内の相対的序列、優越感・劣等感の解釈と、それを知覚した上での自己表現から体育教師としての職業的社会化が進むことに加え、体育教師として同一性が獲得しやすい場面が、自分が専門としてきたスポーツであることから、それがスポーツにおける序列的な観点から授業をうける子どもたちを評価し、「できる・できない」から指導が収斂することが、運動の楽しさという目標から逸脱した指導になると考えられる。

### 西田のビリーフシステムの全体構造

これまで述べてきた体育教師についての役割期待や、体育教師育成についての潜在的カリキュラムとしての運動部活動の所属によってどのような経緯で信念形成が行われるのかについて西田(1998)のビリーフシステムの仮設モデル(図1)を参考にしながら考察する。

西田は、社会心理学の観点から信念構造について、①個人的現実性(直接知覚や論理的推論などの個人的経験から得られる客観的事実)、②社会的現実性(他者の経験や意見によって合意されているという間接的経験を通した客観的事実)、③対象価値性(ビリーフを形成している対象に与えられる価値の程度)、④連結価値性(ビリーフ形成の対象や属性との連結性に与えられる価値の程度)の4層から形成されるとし、ビリーフシステムの仮設モデルを提唱している。

西田は信念の形成について、まず①個人的現実性の高低を吟味し、高いと判断したものに関して、個人が知識としての信念形成を行う。その後、②社会的現実性として「専門家が言っていたから」という権威性、「みんながそう言っていたから」という社会的合意性を基に、自己だけでは判断しえない性質を持つステレオタイプとしての信念形成となり、さらにそこから③対象価値性として形成された信念が個人のある対象への嗜好に沿うものかどうかの確認を行い、最後に④連結価値性としてビリーフの内容に特別な愛着を抱いているかを信念保持のチェック基準となると仮定する。これまで確認してきた内容と照会すれば、まず①個人的現実性では、体育教師が所属していた運動部活動に関する規律意識について、部活動を成立させている暗黙的なルールとして「知識」を獲得することとなる。その後、②社会的現実性として、実際に運動部活動に所属する中で、周囲の部員が規律意識を守っていくなかでその社会的現実性を強化していくことに加え、卒業後に教師として実際に勤務する中で周囲から与えられる役割期待から、社会的現実性を獲得することが予想される。またそこから石村・山西の研究で得られた「怖さ」を用いた生徒指導による生徒管理の成功体験などによって③対象価値性を獲得していくことも示唆される。このように西田のビリーフシステムの仮設モデルと体育教師の成長過程や勤務状況を検討すると、体育教師が競争主義・管理主義的な信念

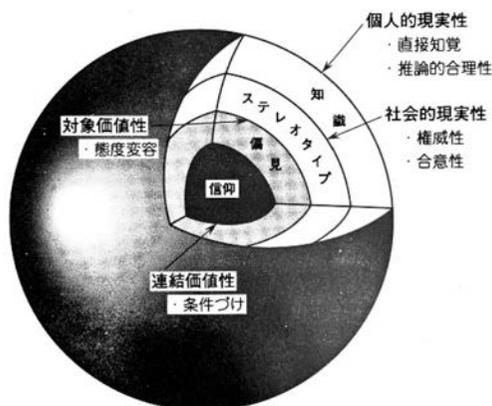


図1 ビリーフシステムの仮設モデル(西田, 1998)<sup>4)</sup>

を指導に用いる可能性が存在する。ここからはこのような競争主義・管理主義的信念を用いて、指導にあたることは体育授業にどのような影響を与えるのか概観していく。

## 5. 体育教師の競争主義・管理主義的信念が授業に与える影響

これまで述べてきたように、体育教師の信念形成において、教員養成課程での運動部活動における潜在的なカリキュラムとしての上下関係の重視や、規律意識の高さ、また競技スポーツに対する同一化の意識に加え、実際に教職の現場に立った際に伴う他教師からの生徒指導への役割期待などから、体育教師の競争主義・管理主義的な信念の形成の可能性が考えられる。

では、そのような体育教師が保持しやすい競争主義・管理主義的な信念がどのように体育授業の豊かなスポーツライフの形成、また生涯スポーツの継続に影響するのかを検討する。ここでは、体育授業における「楽しさ」の構築過程と、体育授業における運動有能感の高まり、学校卒業後のスポーツの実施形態と体育教師の指導との対比を行うことで競争主義・管理主義的な信念と体育授業の関係について考察する。

体育授業の楽しさを規定する要因については、伊藤・織奥（1987）が体育授業の楽しさを規定する要因として、児童生徒側では「レクリエーションと健康」、「能力の認知」、「教授行動」、「自己決定」「統制感」、「集団行動」の6つによって認知していると述べている。そのうちの「自己決定」、「集団行動」以外については、教師側から見ても楽しさの要因となっていることを明らかにしている。その要因のうちの「自己決定」については内発的動機づけの中核的な概念であるが、これを教師側が認知していなかったという研究結果を踏まえると、体育教師の管理主義的な指導や、生徒への過度な競争主義的な信念構造から、生徒への一方的な教授に陥っている可能性も考えられ、体育の目標と相反すると予想される。

次に運動有能感に対する影響である。運動有能感の認知について、岡沢ら（1996）は運動有能感が学習意欲、運動意欲に大きく影響し、生涯スポーツ実践者の育成に必要であるとし、その構造について「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」で構成されているとしている。そのうちの「受容感」は、運動において教師や仲間から受けられているかについての認知であるが、吉村・日角（2008）は体育授業における教師からの声掛けについて、教師の言葉かけの多さが生徒の受容感の獲得につながるとしている。この運動有能感を構成する受容感に関して、体育教師の競争主義的な信念から検討すると、沢田（2001）の指摘でもあったように、スポーツの実施において「できる・できない」から捉えてしまえば、必然的に言葉かけを受ける児童生徒と受けにくい児童生徒の二分化の恐れがある。また体育授業において競争主義・相対的評価を持ち込むことは「身体的有能さの認知」に関しても、運動能力の高いものだけが高まることが予想できる。現在、学校体育の中で運動を行う児童生徒の二分化が叫ばれているが、このような体育教師の信念構造が運動有能感に与える影響からも示唆され、これについても本来目指すべき体育科の目的と反する効果が生じると予想できる。

最後に卒業後のスポーツライフの実施形態の調査から、学校体育の改善について検討した根本ら(2021)の研究の観点である。根本らは成人女性が所属するランニングクラブへの面接調査から豊かなスポーツライフの実現プロセスについて検討している。その結果として、根本は、会話をしながら走るような持久走の授業実践に触れつつ、ランニングペースや競争、駆け引きといった競争意識を伴った持久走だけでなく、スポーツにおける多様な価値を体育授業に取り入れた授業研究が必要であるとしている。このことは体育授業における生涯スポーツ実践者の増加という目標に非常に示唆的であるが、この根本の研究の観点を体育授業に取り入れるためには、自らの専門性に同一性を感じやすいとされる体育教師自身が、スポーツのあり方を競技性という枠だけではなく、生涯スポーツを含めた多様な観点から捉えることが必要であり、そのためには自らの体育教師としての信念構造を再度見直し、体育、またスポーツの捉え方を多様な価値を含んだものとして再構成することが求められる。

## 6. おわりに

ここまで体育教師が抱きやすいと考えられる競争主義・管理主義的な信念が体育授業の実施において、その目標と反する場合が考えられた。本稿は先行研究の概観からの考察であり、アンケート調査、もしくはインタビュー調査など実証的な研究に至っていない点はこれからの課題である。それとともに体育教師というかなり広い枠で捉えており、学校校種としての考察、専門種目特性を背景とした信念構成の可能性にまでは触れられていない。今後はそのような調査を行った上で、実際にスポーツ実施にどのような影響を与えるのかを検討する必要がある。

## 引用文献

- 1) 秋田喜代美. (1996). 教師の信念体系. 秋田喜代美・森 敏昭(編), 教育心理学キーワード (pp.156-157). 有斐閣双書.
- 2) 安彦忠彦. (2009). 学校教育における「教科」の本質と役割. 学校教育研究, 24, 20-31.
- 3) 西原康行. (2006). 体育の意義と体育教師の力量の関係性. 現代社会文化研究, 37, 19-28.
- 4) 西田公昭. (1998). 「信じるこころ」の科学: マインドコントロールとビリーフシステムの社会心理学 (p.204). サイエンス社.

## 参考文献

- 朝倉雅史・清水紀宏. (2014). 体育教師の信念が経験と成長に及ぼす影響: 「教師イメージ」と「仕事の信念」の構造と機能. 体育学研究, 59, 29-51
- 橋本剛幸・永浜明子. (2013). 児童生徒のアンケート分析からみた学校体育カリキュラムの研究: 生涯スポーツに

- つながる授業を目指して、『大阪教育大学紀要』第V部門 教科教育. **62** (1), 79-93.
- 池田延行. (2020). 続「体育・保健体育科」における学習指導要領の変遷. 公益財団法人 日本学校体育研究連合会 70周年記念誌, 40-43.
- 石村雅雄・山西哲也. (2007). 体育教師の役割意識について. 鳴門教育大学研究紀要, **22**, 51-59.
- 伊藤豊彦・織奥信男. (1987). 体育学習における児童・生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識. 体育学研究. **33** (2), 123-133.
- 小泉 綾. (1996). 保健体育科教師の人間関係と職務観に関する研究. 東海大学紀要体育学部. **26**, 93-101.
- 文部科学省. (2017). 小学校学習指導要領体育編解説.
- 文部科学省. (2017). 中学校学習指導要領保健体育編.
- 根本 想・長谷孝治・岡田悠佑・金沢翔一・和田博史. (2021). 豊かなスポーツライフの実現課程：ランニングクラブに所属する成人前期女性市民ランナーの実践を手掛かりとして. 育英短期大学研究紀要. **38**, 51-63.
- 岡沢祥訓・北 真佐美・諏訪祐一郎. (1996). 運動有能感とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究. **16** (2), 145-155.
- 坂本拓弥. (2013). 「体育教師らしさ」を担う身体文化の形成課程：体育教師の身体論序説. 体育学研究, **58**, 505-521.
- 沢田和明. (2001). 体育教師論：体育教師はどのように作られ、利用されてきたか. 杉本厚夫（編）, 体育教育を学ぶ人のために (pp.204-219). 世界思想社.
- 杉本厚夫. (1989). 体育教師の社会的アンビバレンス. 京都体育学研究, **4**, 1-11.
- 須甲理生・四方田健二. (2013). 体育教師が有する教師観に関する：考察－運動部活動指導者としての教師観から授業者としての教師観へ. 日本体育大学研究紀, **43**, 41-50.
- スポーツ庁. (2022). 令和3年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」([https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/houdou/2021/index.html](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/2021/index.html)) (最終閲覧2023年2月14日20時47分).
- 湯口雅史・江尻沙和香. (2022). 体育科授業論：強化の本質と運動の見方・考え方に着目して. 鳴門教育大学研究紀要, **37**, 298-312.
- 米津光治. (2017). 日本の学校体育の変遷と課題. 生活科学研究, **39**, 173-182.
- 吉村 功・日角知世. (2008). 体育教師や仲間からの言葉かけが他者受容感に及ぼす影響. 北海道教育大学紀要 (教育科学編). **56** (1), 183-192.

